日文教授用資料

「誰一人取り残されない」の実現を目指して

誰一人取り残されない教育
～教育委員会ができること～
亀田　香利

安心感のある教室づくり
～「心をあたためる」教師の指導性～
宗像　北斗

教員がつくる「学校」でも「家庭」でもない「第３の居場所」の可能性
岩羽　純一

『誰一人取り残されない』を目指して
～学校管理職の立場から～
杉本　敬之

interview
インタビュー

黒田 千佳氏に聞きました！
「誰一人取り残されない」に向けて

「誰一人取り残されない」を目指して
～学校外の居場所の中での実践から～
廣瀬　貴樹

日文のWebサイト
日文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

「誰一人取り残されない」の 実現を目指して はじめに

「誰一人取り残されない」を実現していくことは非常に重要なことです。しかし、達成することは正直にいうと非常に難しい状況です。実際に今の日本の学校教育の様子を見ていきましょう。

文部科学省の調査※1によると、令和５年度の不登校児童生徒数は346,482人でした。不登校児童生徒の割合は3.7％といずれの数値も過去最高となっています。不登校の理由は**「無気力や不安」**が一番多く、この理由が不登校児童生徒に占める割合の中で53.3％となっています。不登校の増加傾向が強く見られ、また、児童生徒は無気力であったり、不安を抱えたりしている状況です。

文部科学省は、令和5年に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)を取りまとめました。COCOLOプランには、三つの目指す姿があります。

1、不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える

2、心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援する

3、学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする

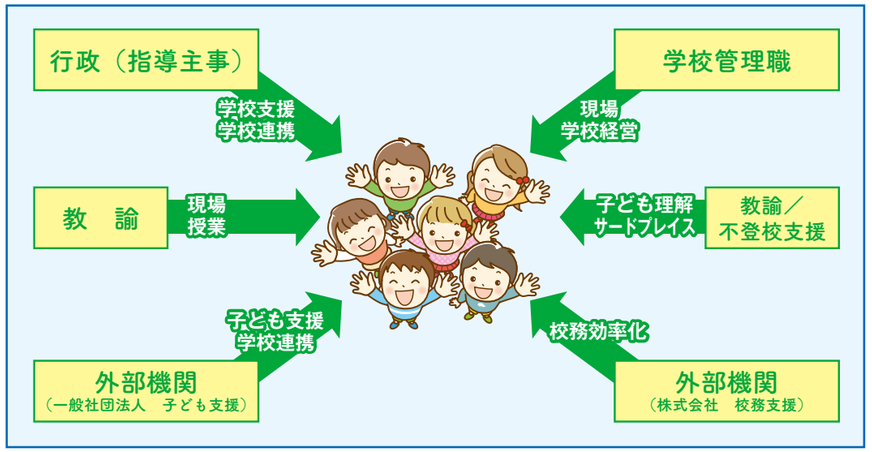
当時の文部科学大臣永岡桂子氏は、**「今回のプランを実現するためには、行政だけでなく、学校、地域社会、各ご家庭、NPO、フリースクール関係者等が、相互に理解や連携をしながら、子供たちのためにそれぞれの持ち場で取組を進めることが必要です。」**とメッセージを出しています。

「誰一人取り残されない」の実現には様々な努力や工夫が必要になります。不確実な世の中で、一概に〇〇をすることで全ての学校現場において「誰一人取り残されない」が実現するとは思えません。地域によって、家庭環境・教育予算・教育施策などが異なっているからです。また、子どもたち一人ひとりの個性も多様です。だからこそ全国の様々な取り組みを知り、それを学校現場で活躍されている先生方それぞれが解釈し、ご自身に合う形で行動することで「誰一人取り残されない」の実現に向かっていくのだと思います。

本誌では、様々な立場から「誰一人取り残されない」の実現のために取り組んでいる方々の実践例をお伝えします。学校行政(指導主事)の立場・学校管理職(副校長)の立場・学級担任(教諭)の立場・サードプレイス・フリースクールでの子どもの支援(一般社団法人かけはし)の立場・学校業務改善支援(株式会社137)の立場です。

現在の学校教育は、学級担任一人で全てを抱えて、よりよい教育を実現していくものではありません。学校内での様々な立場(校長・教頭や副校長・学年主任・学級担任・養護教諭・学校事務職員・学校技能職員・学校調理員など)の人・役所といった公的機関のほか、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、教育に関わる企業の方などが連携していくチームで行うものなのです。

本誌の実践例を通して、ご自身の勤めている自治体や学校に還元していただければ幸いです。



▲「誰一人取り残されない」の実現のためのアプローチ図

横浜市立綱島東小学校　副校長　杉本 敬之

【杉本 敬之：プロフィール】
横浜市立綱島東小学校　副校長。横浜市学力・学習状況調査社会科作問委員や横浜市社会科教育課程委員などを務める。社会科や教職員の人材育成や管理職の働き方に関する書籍を執筆。現在、公立小学校副校長として学校経営を行いながら、教職員の勉強会「先生をエンパワーメントする会」の運営をしている。

※1：令和５年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査

誰一人取り残されない教育
～教育委員会ができること～

石川県能美市教育委員会　学校支援課　　亀田 香利

つながりを育む

中学３年で担任した女子生徒は、小学４年生の途中から約５年間、不登校の状態でした。当時の教職員も彼女の顔を知らず、周囲の友達の記憶も小学4年生の頃のまま止まっていました。私は、義務教育最後の年に担任として出会えたこの縁を大切にしたいと思い、４月の学級開きを前に、彼女の家を訪ねました。

玄関に出られたのはお母さんで、彼女の姿は見えません。それでも、時々、家庭訪問することを快く承諾してくれました。その後、お便りを届けたり、修学旅行の絵葉書にメッセージを添えてお土産を持っていったり、お母さんと雑談したりと、玄関先での訪問を重ねました。彼女は、奥のリビングから私たちの会話をいつも聞いていたそうです。

家庭訪問の帰り際、私は姿が見えなくても、リビングにいるであろう彼女に向かって、「また来るね。ありがとう」と声をかけることが習慣になりました。ある日の訪問で、リビングのドアから彼女の手が少しだけ見えました。私とお母さんの会話に興味を持ったのか、「ここにいるよ」とサインを送ってくれたのか、理由はわかりませんが、とても嬉しかったのを覚えています。

それからの訪問は、彼女の手に向かって話しかける形に変わっていきました。帰り際には、手を振ってくれるようにもなりました。こうして、**彼女との無言のコミュニケーション**が少しずつ生まれていったのです。

当時、担任だった私は、クラスのみんなとの**交換ノート「心の宝箱ノート」**という取り組みを行っていました。そうした中で、彼女の順番が回ってきた時に私は、彼女の手に向かってノートを届けました。「負担にならなければ読んでみて。名前だけのサインでもいいし、何か書きたければ書いてくれても嬉しい。無理のない範囲で大丈夫。もし読みたくなければ、そのまま置いたままでもいいよ」と伝えました。

数日後の訪問でノートを開くと、クラスの友達と私に対して、彼女が興味を持ったことがたくさん書かれていました。その中に、「私はカメを飼っています」という一文がありました。私は、自分の名前が亀田であることから、親しみを感じて嬉しくなりました。

彼女の手に向かって「カメが好きなの？ 嬉しい！私はカメダです」と伝えると、その日、彼女がかすかに笑う声が聞こえたのです。この出来事をきっかけに、彼女と私との間に、カメという**共通点を通して「つながり」**が生まれはじめました。

クラスメイトには、彼女の了承を得て、日頃から彼女の様子を伝えていました。クラスメイトも手紙を渡すなど、間接的な交流が生まれていました。そ してついに、彼女が顔を見せてくれる日が訪れました。少しはにかんだ、とても素敵な笑顔でした。

それからは、家庭訪問での会話が弾むようになり、冗談を交わすなど、楽しい時間を過ごせるようになりました。登校への道が開けてきたと感じ、楽しい会話の流れの中でさりげなく学校へ来るようにと誘ってみると、数分だけの別室登校が実現しました。

これを機に、彼女は少しずつ登校するようになり、秋には運動会を見学、クラスのみんなと一緒にグラウンドを駆け回るまでになりました。そして、高校への進学を希望するようになり、別室や自宅での学習もはじめました。

教育相談担当や学年スタッフも加わり、学校全体で彼女の学習を支えました。そして、高校に無事合格し、卒業式にも参加することができました。以前は母親の送迎なしでは外出できなかった彼女が、私の離任式に一人で駆けつけ、自信に満ちた笑顔で挨拶に来てくれたのです。

義務教育最後の年に彼女とこのような「つながり」を築けたことは、教育者として大きな喜びでした。

それから14年、その中学校に教頭として再度赴任すると、教育実習生名簿の中に、彼女の名前を見つけたのです。人間の可能性は計り知れないと感じると同時に、この**教師の喜び**は、生徒が卒業した後にもあると思える嬉しい出来事でした。

誰一人取り残されない学びの保障で大切なこと

全国に先駆けて、令和３年に中部地方初となる不登校特例校（現在は学びの多様化学校）が、岐阜県に開講されました。その名は草潤（そうじゅん）中学校。開校式で京都大学博物館の塩瀬隆之教授が「バーバパパのがっこう」を例えに、子どもたち一人ひとりの個性豊かな多様性と自律学習を尊重した学校が理想ではないかと語られたことが話題になった学校です。いつ、どこで、誰と、何を学びたいのか、子どもたちに学びの選択肢と、学びたいと思った時に学べる環境を整えておくこと、これが大切なのではないかと。今、全国各地で、このような学びの多様化学校が新設され、注目されるようになっています。子どもたちの一人ひとりの個のニーズに応じて、安心して過ごし、学ぶことができる場、多様な学びの場が提供されはじめているのです。

教育委員会でできること

①多様な学びの場を担保する

「誰一人取り残されない学びの保障」をするためには、学校や教室に入れない子どもに対して、多様な学びの場を担保していくことが大事だと考えています。全国各地で、学びの場が工夫されていることと思いますが、本市での取り組みの例を紹介します。

■校内サポートルーム「Our Room」
相談室等の別室にて、個別のブースと共用スペースとを設置。専属の教員を配置。

■市教育センターふれあい教室
学校に登校できない児童生徒の学びの場として専門員を配置。

■コミュニティ・スクール（学校運営協議会）が主体のサポートルーム「ほっとルーム」
地域住民が支援してくれる学校内にある教室。朝１限目に教室に入ることができない児童を別室で支援。

■フリースクールとの連携
校長と教育委員会で教育理念や環境等の状況を把握。

■GIGA端末を活用したオンライン授業
自宅から授業にオンライン参加。

②アウトリーチ・他課との連携で切れ目のない支援

教育センターのスクールソーシャルワーカーや相談員が家庭訪問。

子育て支援課・福祉課・健康推進課と連携し、切れ目のない重層支援。

③教育相談や特別支援教育に関する職員の配置

県より、スクールカウンセラー。市より、特別支援教育支援員、専門相談員、特別支援学校アドバイザーを学校へ配置。

④研修機会の担保

北陸先端科学技術大学院大学との連携により「こころのプログラム」を共同開発。

「学びの多様化学校」へ職員を視察派遣。学びを市内に還元。

GIGAスクール構想における学びの保障

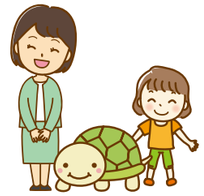
一人１台端末が貸与されたことにより、児童生徒の**多様な学びとつながりが実現**できるようになりました。不登校児童生徒が**端末を家に持ち帰って**いることで、オンライン授業を受けたり、朝礼や終礼にオンラインで参加したり、放課後、担任とオンライン会話したり、コメントしたりすることができています。クラウド上のクラスルームでは、先生からの課題が送られたり、課題を提出したりできるほか、友だちと共同編集しながら学びに参加することも行われています。学校サイトでは、いつでも悩み相談ができる「先生、ちょっと相談が……」というアンケートフォームを使った取り組みで、早期発見・早期対応ができている事例も出はじめています。デジタル時代における不登校児童生徒への支援は、まだまだ可能性があると考えているところです。

教育委員会は、こうした環境を整備し、教師が児童生徒としっかりと向き合うことのできる時間を確保するための校務ＤＸも進めることが大切だと考えています。

最後に

ドミニク・チェン著書『未来をつくる言葉－わかりあえなさをつなぐために－』（新潮社,2020）の中に、このような一節があります。「コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それでもなお、共に在ることを受け入れる技法である。（中略）私たちは互いを完全にわかりあうことなどできない。それでも、**わかりあえなさをつなぐ**ことによって、その結び目から新たな意味と価値が湧き出てくる。」と。この一節を目にし、玄関先で無言の手への会話からはじまった彼女との「カメのつながり」を思い出しました。不登校を経験していない私に、彼女の気持ちを完全にわかるなんてことはありません。わからないからこそ、彼女の**サインや無言の声に耳を澄ませ**、想像し、彼女の未来につながる今をともにつくっていく。子どもには教師から見てわかりえないほどの可能性があり、**いつかその子のタイミングで花開く時が来る**。教師はそれを信じて、時には待ち、時にはそっと背中を押す。

教育委員会は、そんな教師の営みを支えられるような存在でありたいと思います。



【亀田　香利：プロフィール】
能美市教育委員会　学校支援課　課長。石川県で教員採用後、公立小中学校教諭、石川県教育委員会小松教育事務所指導主事、川北町教育委員会学校教育課 課長補佐兼指導主事、課参事、公立小中学校教頭を務める。現在、能美市教育委員会学校支援課　課長として教育・学校DXを推進している。

『誰一人取り残されない』を目指して ～学校管理職の立場から～

横浜市立綱島東小学校　副校長　杉本 敬之

教職員・地域・大学生など様々な立場の人と学校教育をつなげることで「誰一人取り残されない教育の実現を目指す！」**これが学校管理職のできる大きな役割だと考えています。**『教職員が働きやすい環境・地域学校協働活動本部・大学生と協働した学校教育』の三つの視点でお伝えします。

教職員が働きやすい環境を整える

本校の教職員はとてもいきいきと働いています。**先生が「先生」を楽しむことで、先生たちが主体的になり**、子どもたちによりよい教育を還元していくことにつながります。

○効率化を図ることで教職員が主体的に仕事をできる時間を増やす

教職員がやりたいことを実現するためには、考えて行動に移すための**時間**が必要です。**時間の確保のために様々な業務の効率化**を図ることが大切です。本校が取り組んだ事例を具体的に紹介します。

まず、出欠連絡を基本的にアプリで完結、欠席した子どもへの時間割などの連絡もアプリで行っています。これに加えて、本校の勤務時間は16時45分までなので、勤務時間が終わると同時に留守番電話設定にしています。次に、会議の精選をしました。企画会を廃止し、校務支援ツールの掲示板機能を活用しました。事前に職員会議資料を周知し、意見を集約しました。企画会の時間の削減、さらに全職員の意見が職員会議前に集約されることで会議の効率化につながりました。続いて、基本時程を変更しました。下校時間を基本的に15分繰り上げることで放課後の時間を確保しました。また、教務主任と連携し、標準時数を踏まえて余剰時間をほぼ無くしています。

効率化を図るためには、できそうなことをしっかりと声に出すことが大切です。私は校長と教務のメンバーに考えを小出しにしながら、アドバイスをもらったり、協議を行ったりすることで進めました。

○教職員の強みや今後の成長を期待して仕事ができるようにする

教職員それぞれに強みがあります。私自身にはとても思いつかないようなアイデアをたくさん出してくれます。また、的確に校務を進めてくださる方もいます。それぞれの強みを生かしてもらうためには、**学校管理職が教職員一人ひとりのことをよく知る**ことが大切です。そして、**強みを知り、適材適所に校務を整理していくことが管理職の一つの役割です。**

教職員のことを知るために取り組んだことがあります。まず、教職員面談で先生方が今年度取り組みたいことをヒアリングしました。**年度内で取り組んでみたいことや１年後にどうなっていたいのか**などをたくさん話してもらいます。その中で、学校経営上期待していること、その方の強みを具体的に言語化していくようにしました。それを踏まえて、**校長から１年間に留まらない将来の教職員としてのビジョン**やその教職員のよさを話してもらいました。この面談を通して、教職員の考えを知ることができました。

そして、校務の整理です。主に教育委員会からの各種依頼や校務を、意図を持って割り振るようにしています。聞いたことがあるかもしれませんが、学校管理職には１日に何十件もの通知が届きます。特に、年度当初は数日で優に100件を超える通知が来ます。その通知に応じた割振りを行います。この時が教頭(副校長)の腕の見せどころです。面談や普段の仕事ぶりを鑑みて、誰に割り振るのが適当かを考えることができます。「○○をお願いします」と、全ての方に直接声をかけて割り振ることは難しいですが、ここぞという時には声をかけるようにしています。また、チャレンジする校務の割り振りをする際には、校長に確認を取ってから行っています。

人は自分の安心する範囲(コンフォートゾーン)で仕事をするよりも、ちょっと背伸びをした(ストレッチゾーン)で仕事をするほうが、今後の成長が期待できます。面談での情報や校務の内容を見極め、**教職員一人ひとりに応じたストレッチゾーンの仕事を割り振ること**で、より教職員が強みを生かしていけるように取り組んでいます。

「効率化を図ることで教職員が主体的に仕事をできる時間を増やす・教職員の強みや今後の成長を期待して仕事ができるようにする」ことで、教職員が仕事を楽しむようになり、子どもたち一人ひとりに寄り添った教育を考えながら取り組むことができるようになります。

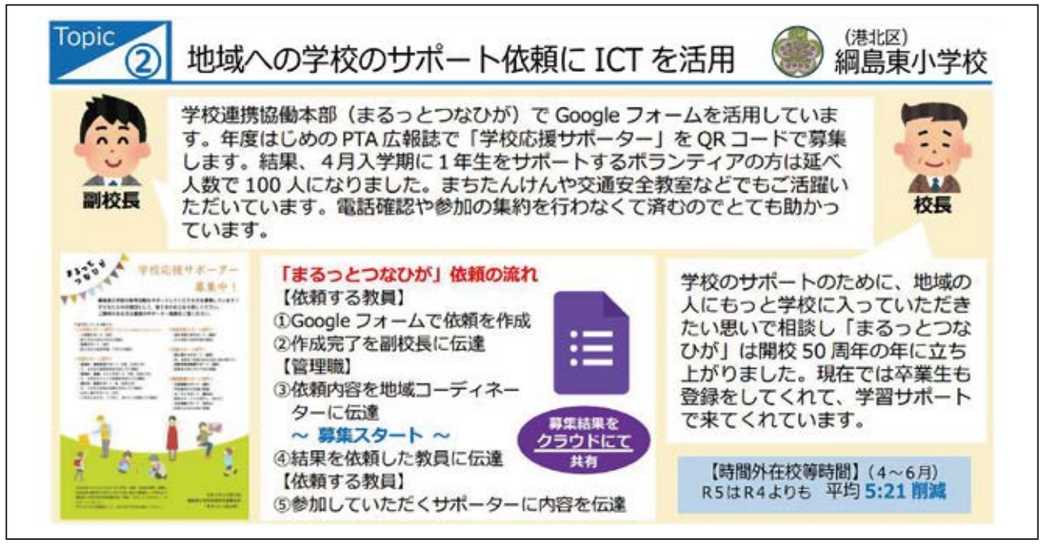
地域学校協働本部(綱島東小学校通称「まるっとつなひが」)の活用

地域の学校教育への参画の機会があることは非常に大切です。数多くの理由がありますが、ここでは２点について述べます。

まず１点目は「地域の学校教育に対する理解が深まること」です。「百聞は一見に如かず」という言葉がありますが、地域の方が学校教育に関わることで、学校の実態を理解してもらうことができます。それは、子どもたちが日々学ぶ姿や先生方が熱心に指導している姿を知ることにつながります。本校の地域のある方が、「子どもの細かいところまで先生が見てくれていることに驚いた」という感想をおっしゃっていました。このように、**学校教育のリアルを知ってもらう**絶好の機会となります。

２点目は「持続的な学校教育活動につながること」です。教職員は遅かれ早かれ必ず異動があります。しかし、地域の方の異動はありません。地域の方のサポートは、持続的に「学校を支える」ことにつながるのです。さらに、地域のつながりを生かして学校教育への参画者を増やすこともできます。参加者の方による地域の方々への積極的な声掛けも行われるようになってきています。

本校では、地域学校協働活動本部(本校では通称「まるっとつなひが」)が活躍しています。令和５年度には、地域の方や保護者、大学生などが、地域学校協働活動本部が運営するボランティアに登録してくださいました。年度当初の４月に新１年生の支援のボランティアとして延べ100人の方に参加してもらいました。なお、ボランティア募集やボランティアの詳細の周知を「まるっとつなひが」の地域コーディネーターに行っていただいています。ボランティア活動は、新１年生の日常生活のサポート・校外学習の児童見守り・家庭科実習のサポート・白衣修繕・学校環境整備など多岐にわたっています。**地域学校協働本部の活動が、子どもたちの学習環境を持続的に支えるようになっています。**



▲横浜市教育委員会「働き方改革通信：Smile(令和５年度２号)」より引用

大学生(院生も含む)と協働して学校教育を行う

大学生と協働して学校教育を推進するために、教育委員会が行っている学生ボランティア事業・インターンシップ制度を積極的に活用すべく、地域学校協働活動本部のチラシを各大学に送付しました。結果、本校が少しずつ認知されるようになり、活動が広がりました。

令和５年度は、横浜国立大学・神奈川大学・明治学院大学・國學院大學・関東学院大学・中央大学・東京大学・和光大学などの学生に教育活動に関わってもらいました。具体的には、宿泊体験学習や遠足といった校外学習の引率などです。また、学校内で行われる授業のサポートや個に応じた支援のサポートなどもお願いしています。

現在、学校内でのサポートは、基本的に毎週実施できています。どの学級のサポートに入るのかは、特別支援コーディネーターの教員が割り振りをしています。

特別支援コーディネーターの教員は、各クラスの様子や児童一人ひとりの課題を把握しています。その知見を生かして、大学生を割り振ることで、子どもたちの教育を支援する強力なサポートとなっています。

また、学生の研究に協力することも行いました。児童へのアプローチ方法や教職員の心理などについてです。将来、教育関係の仕事に就きたいと考えている大学生が教育現場に関わることで、実態理解につながります。私たちが研究に協力することで、学生の知見を広げていくことができます。

大学生と協働することで、子どもたち一人ひとりに対して、きめ細やかな支援を行えるようになっています。

最後に

この稿では、教職員と地域や大学生との協働について伝えました。大切なのは、教職員がやりたいことを実現できる・地域の方をパートナーとして協働して教育活動を行う環境がある・大学生などの外部の人たちと連携して子どもを見ていくことができるなど、**互いにとってwin-winの関係を築くことが大切です。**

win-winの関係は、互いにとって無理がなく持続可能です。このような活動が**「誰一人取り残されない」の実現につながっていくと思います。**

安心感のある教室づくり
～「心をあたためる」教師の指導性～

横浜市立幸ケ谷小学校　教諭　　宗像 北斗

はじめに

「どこまでいっても『個』」

初任校で出会った特活主任の先生がかけてくれた言葉です。MAX40人の子どもを受け持つ学級担任はどうしても集団を動かすことに注力しがち……。「それでも挑み続けたいことだけどね」と話してくれた日のことを最近よく思い出します。

不登校児童生徒が34万人余りの昨今、子どもたちを取り巻く環境にきしみが生じていると言わざるを得ません。そんな中、「誰一人取り残されない」意識の広がりは、打開の一手となる可能性を秘めていると感じています。また、尊敬する先輩先生方は共通して自然と意識されていたことのようにも思えます。今こそ、これまでの経験を振り返りながら、学級担任としてどのようなことができるかを本気で考えるべきタイミングなのではないでしょうか。

教室で大切にしたい、三つの「づくり」

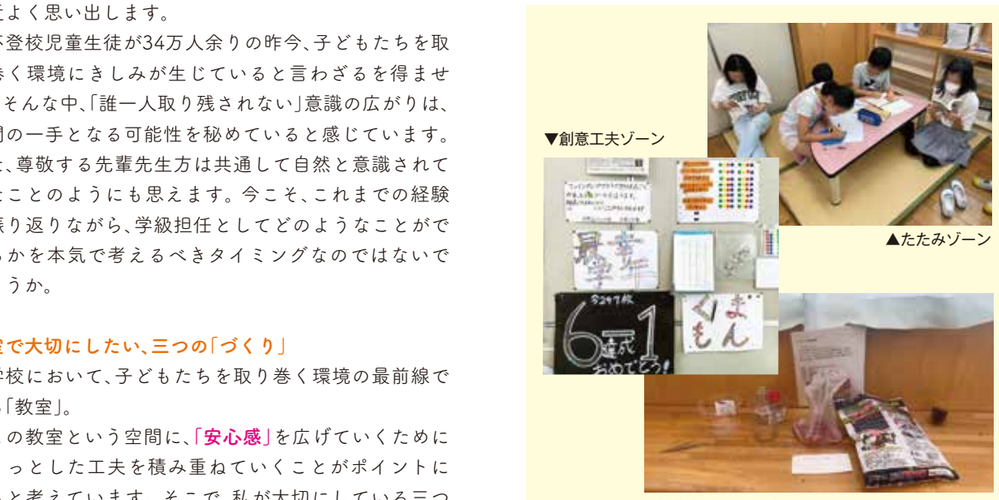
学校において、子どもたちを取り巻く環境の最前線である「教室」。

この教室という空間に、**「安心感」**を広げていくためにちょっとした工夫を積み重ねていくことがポイントになると考えています。そこで、私が大切にしている三つの「づくり」を紹介します。

❶ 居場所を感じられるような「環境づくり」

例えば、年によってですが、私が担任する教室の入り口には、こんな表が貼られることがあります。「今日、自分には果たすべき役割がある」という状況によって、子どもが自己有用感を得られていると感じられる場面を見ることがありました。ここでは役割を務めた子どもたちに、自然な形で「ありがとう」の声をかけることも大切にしていました。

また、教室にこんなゾーンが生まれたこともありました。



ポイントは、**居心地**なのかなと思っています。「自分が必要とされていること」「自分らしく過ごせていること」を感じられるような環境づくりを大切にしていけたらと考えています。

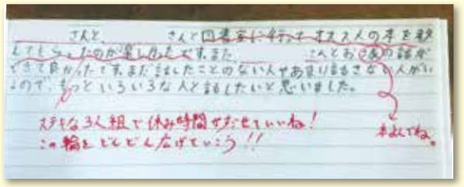
▲一人一役当番表：内容は４月に子どもたちと考えます。

❷ 一人ひとりの子どもとの「関係づくり」

休み時間など、他の教室の前を通ると担任の先生が子どもたちに囲まれ談笑している場面をよく見ます。先生も笑顔いっぱいの様子からほっこりさせられることもありますが、「＝（イコール）安心感のある教室」とは一概には言えないとも思っています。

それは、聞きたいことがあっても、話題に興味があっても、自らその輪に入ってこられない子が教室には一定数いるからです。さて、その子たちとの関係づくりをどのようにしていけばよいのでしょう。

私は、金曜日の最後の５分、子どもたちに１週間の振り返りや自分が思っているモヤモヤを書いてもらっています。もちろん他の子には見せない約束のもとで。月曜日の朝にはコメントを入れて返すというルーティンを続けています。子どもたちの関係性が見えたり、安心して過ごせているかを確認したりすることにもつながります。



※日記ならぬ「週記」…ノートの名前は毎年子どもたちと考えています。ちなみに大きさはＢ５判のノートを裁断機で半分に切ったサイズで文章量が長くなりすぎないこともポイントです。

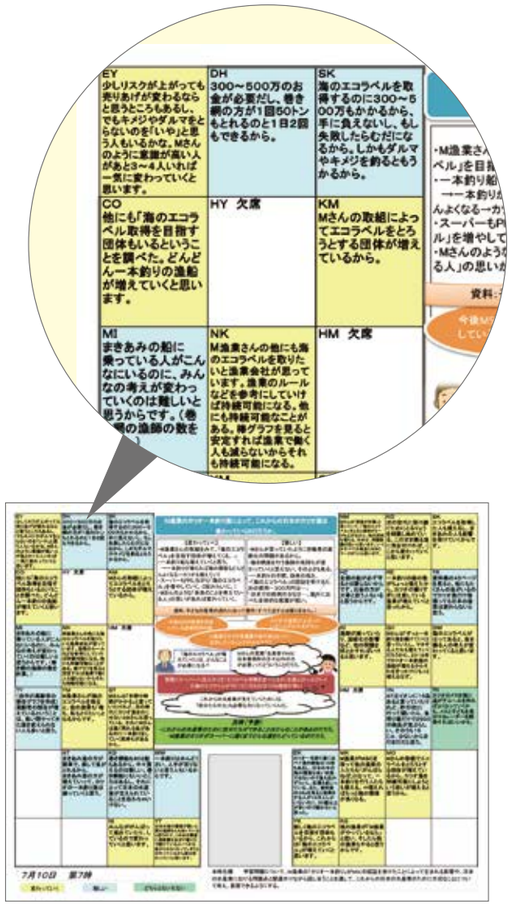
ちなみに、この際のコメントにも多用するのですが、**「○○さんらしいね」**という言葉かけを、私は普段から大切にしています。「『その子らしさ』の全面肯定」…それが、関係性を築くうえでの第一歩になると考えています。

❸ 自分らしさをいきいきと表現できる「授業づくり」

そして何といっても、教師は授業で勝負！子どもたちが教室で過ごす時間の約70％を占める「授業の時間」を通して、安心感を高めていくことができたら最強です。子どもたちが自信を持って表現できるために……、私が大切にしていることは**「共通の土台」**と**「みとり」**です。

例えば、年度のはじめに「話し合いことば」を確認することがあります。まずは、表現の第一歩を踏み出すためのハードルを下げることを意識しています。

また、話し合いを行う際には、事前にノートを見て子どもの考えを座席表にまとめておくようにしています。「子どもたち全員がスタートラインに立てているか」を確認したり、その子の考えを活かせるポイントを想定したりします。ひと手間ではありますが、授業内でのその子の変容への価値づけも可能になり、それは子どもたちが成長や伸びの実感を得られることにもつながると感じています。



※毎時間は難しいですが、座席表指導案にまとめることもあります。

最後に

❶～❸に共通している教師の指導性は、**「子どもたちの心をあたためていくこと」**といえそうです。教室の子どもたちは40人40色…。生成AIがいくら発達しても、その子の心に届く言葉を選んだり、心の涙に気づいたりすることは難しいでしょう。一人ひとりの子どもが持つ力へのリスペクトを胸に、「どこまでいっても『個』」と向き合っていこうとできる教師でありたいと思います。

※原稿執筆の段階では40人学級の学年もありましたが、令和７年度からは全学年35人学級になります。

実践の参考にしている文献：
・横田富信（2022）『問題解決的な学習の支え方』明治図書出版
・岩瀬直樹（2011）『よくわかる学級ファシリテーション』解放出版社

【宗像 北斗：プロフィール】
横浜市立幸ケ谷小学校　教諭。横浜市小学校社会科研究会役員や横浜市学力・学習状況調査社会科作問委員、横浜市社会科教育課程委員などを務める。国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」など、社会科やESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）に関する書籍を執筆。

教員がつくる「学校」でも「家庭」でもない「第３の居場所」の可能性

横浜市立仏向小学校　教諭　岩羽 純一

「これは、学級崩壊なのか」

学級を担任して３か月。疑念は確信へと変わっていきました。「だいぶ落ち着いてきた」というのが周囲の評価でした。教師の話に集中し、黙々とノートに向かっている。しかし、私は日に日に実感を深めていました。学級として、授業として、学びとして成立していないことを。

話を聞いてくれない訳ではない、鉛筆や消しゴムが飛び交っている訳でもない、理由なく立ち歩いている子どももいない、ただただ反応がない、何を問いかけても、子どもたちは無反応なだけでした。

❶「学校」でも「家庭」でもない「第３の居場所」の可能性

若手から中堅と呼ばれるようになり、少しずつ増えてくる責任やプレッシャー。胃の痛む事態も何とか乗り越えながら、実力もついてきたと思っていました。そんな時に出会った子どもたち。試行錯誤の毎日も空しく、学びの楽しさを提供できないままの状態でした。

そんな悪戦苦闘の日々にじわじわと心が消耗しつつあった私は、初心に返るためにも、「学びの楽しさとは何か？」について改めて考えはじめました。そして、考えれば考えるほど、学校という場所だけでは子ども主体の学びを実現し得ないのではないかと感じるようになったのです。

学校という組織の中にどっぷり染まっていたから見えてこなかった問題点に悶々とする日々。ただ、思い悩んでいても解決しないことは明らかでした。だからこそ、学校で実現できないことは、「学校外で行えばいい。子どもの個性にとことん寄り添い、ともに学んでいく居場所をつくってしまえばいい」という結論に至ったのでした。

❷「第３の居場所づくり」から見えてきたこと

「第３の居場所づくり」は、不登校の子どもとの関わることからはじまりました。当初は学習支援を考えていました。しかし、出会って間もない大人と、「さぁ、勉強しようか」というハードルはかなり高いものです。楽しく学ぶことができるよう試みましたが、子どもが望んでいない活動に取り組むことができるように試行錯誤していると、ふと、「これでは今までやってきたことと何ら変わらないのではないか」と感じるようになりました。「子ども」を前にして「先生」と呼ばれると、自然とそれらしく振る舞ってしまう。そんな気づきを得て考え直し、長女の助けを借りることにしました。

「子どもの相手は、子どもが一番うまいのではないか？」そんな思いからでした。「学校外で勉強をする」という目標を一転させて、一緒にゲームをしたり、公園へ出かけたりと、「その子と友達になること」からはじめました。そのような友達づくり活動を続けていると、「勉強を教えてほしい」という願いを持った子どもとの新たな出会いに恵まれました。教科書に載っている解法にこだわらず、その子どもとの対話を通して理解が深まっていくようじっくりと学んでいきました。

「第３の居場所づくり」が進んで行く中で、私自身がやってみたいことも明らかになってきました。その一つとして、「学校では教えてくれないこと」と題し、「お金」「時間」「自分の強み」といったテーマで授業に挑戦しました。授業内容は「自分が子どもの頃に教えてほしかった」という内容を選択しました。

新しい挑戦から次第に活動の幅が広がり、定期的に来てくれる子どもや大人も増えてきた頃、感じることがありました。

「大人として子どもたちに伝えたいことは山ほどあるが、受け身の知識ばかり伝えていて本当に役立つのか」という疑問です。新たな問題意識を抱えながら活動を続けていた時、何気ない子どもたちとの会話から「カフェをつくったらどうか？」というアイデアが出されました。「ここ（活動拠点）の周囲にくつろげるカフェのような場所がないよね…」という気づきから出たアイデアでした。「いいね！」「やりたい！」と盛り上がる子どもたち。もちろん、大人のスタッフに伝手（つて）や経験はありません。しかし、「子どもが社会と直接つながる体験からこそ学ぶべきことがある」と考え、とにかくプロジェクトを立ち上げることにしたのです。それこそが、「子ども主体の第３の居場所なのではないか」と思います。できる・できないは別として、子どもたちの「やりたい！」を「やってみよう！」といえる仲間が集まっていることが活動の推進力となりました。

❸「子ども」と「大人」が夢を共有する「第３の居場所」

「夢は語ることで実現する」とよくいわれますが、実感したことはありませんでした。しかし、「第３の居場所づくり」をはじめてから「本気で『やりたい！』と伝え続けていれば、おもしろがって協力してくれる仲間が現れる」ということが現実となりました。

「事務所をカフェにしてもいい」という大人。
「コーヒーの淹れ方を教えるよ」というカフェのマスター。
「腕試しにマルシェに参加しないか？」と誘ってくれるパン屋。
様々な大人の協力のもと、カフェプロジェクトは進んでいきました。伝授してもらったコーヒーをマルシェで振る舞い、コーヒーを淹れることだけでなく、接客も体験しました。さらに、カフェとして改装している建物の床貼りをしたり、ヤスリ掛けをしたりしました。そして、令和５年６月３日。「大人と子どもが夢を共有する居場所」として「ピースカフェ」がオープンしたのです。店長は中学校１年生（当時）。オープン当初は、「新メニューの開発」「お客さんとスタッフの動線」など、具体的な営業方法の話し合いでもちきりでした。

❹「第３の居場所」の運営から見えてきた現実

子どもたちの「やりたい！」が大人を巻き込み、約１年をかけて実現した「ピースカフェ」。カフェ活動を重ねていく中で、「そもそもお客さんが来ない」「もっとこの場所を知ってもらう必要があるのではないか？」という新たな課題が生まれました。話し合いを続けていった結果、「子ども向けイベントを開催しよう！」というアイデアが出され、「流しそうめん大会」を催しました。

この初のイベントは大いに盛り上がり、「さぁ、次のイベントは何をしよう？」と意欲が高まったように見えました。しかし、イベント開催によって「活動内容が子どもの手から離れてしまっているのではないか？」という新たな視点の気づきも生まれました。

「このイベントは、本当に子どもたちがやりたいことだったのか？」
「本当に子どもたちがつくり上げたイベントといえるのか？」
「子どもたちの成長や達成感はあったのか？」
ピースカフェを、「子どもの『やりたい！』で運営されている場所としたい！」
「子どもが夢を語り、積極的に実験できる場所でありたい！」
「たくさんの子どもたちに集まってもらいたい！」

という「大人の願いがイベント開催に強く出すぎていたのではないか？」という気づきだったのです。そのような気づきから、再び、「子どもの主体性が発揮できる居場所」を考え直すに至りました。同時に、「子どもの主体性の発揮」が難しいことも実感しました。「誰一人取り残されない」気概は、大切にしたいけれども簡単なことではありません。

「第３の居場所」に感じた可能性は「居場所がある」ということよりも、「どのような居場所として運営していくか」を明確にして運営されることで実現されます。誰かにとって居心地のよい居場所は、誰かにとって落ち着けない居場所となってしまうかもしれない。本当に居場所としている人が、サポートなしに利用できるとも限りません。まずは、**主体性を発揮できる居場所として**運営されること。さらに、**自分の選択で活動ができる**こと。その土台を築く過程で、**話し合う必然性が生まれ、仲間意識が醸成されていく**のです。このようなステップが達成された時、本当に価値のある「第３の居場所」となると考えます。ピースカフェの挑戦は、まだはじまったばかりでした。

❺ 価値のある「第３の居場所」として

私たちが立ち上げた「第３の居場所」は、その機能を活かしきれていませんでした。というのも、本当に居場所を必要としている人の居場所ではなかったからで、これは学級でも同じことがいえると思います。

「この時間を自分の好きなことに使ってごらん」と子どもたちに提案すると、「自由と言われるのが一番困る」という反応をする子どもたちも少なくありません。学級の主導権は教師が握っていて、課題や内容、進め方などが事細かに設定され、教師のチェックを通過しながらゴールまで進んで行くほうが安心な子どもたちもいるのは確かです。しかし、そのような学習経験だけでは、「とことん没頭する」という経験は、提供できないでしょう。同じ課題を同じペースで、同じ方法によって学んでいく経験を積み重ねることによって「その子らしさ」は埋もれてしまうのです。

「選択」の機会を与えられなかった子どもたちに、「自分に合った学習スタイル」を見つけるというのは不可能だと考えます。「第３の居場所づくり」と真剣に向き合い、「子どもの居場所となり得る環境はたくさんある」ということが見えてきました。だからこそ、「必要な時に学校ではない第３の居場所へ通う」といったように、**「子どもが学びを選択する」ことが本当の「学び」の姿**なのではないかと感じます。

学校には「学校」のよさがあります。しかし、「学校だからこそできないこと」もあるのです。その「『できないこと』を『できる場所』として第３の居場所」が価値を発揮できるとしたら、より子どもの個性を伸ばせるのではないかと思います。

「今日はどこで勉強するの？」という問いが“普通”になることで、より子どもの可能性を伸ばすことができるとともに、「不登校」という言葉がなくなることを心から信じています。

【岩羽　純一：プロフィール】
横浜市小学校社会科研究会役員や横浜市社会科教育課程委員などを務める。社会科や不登校支援に関する書籍を執筆。現在、教員をしながら、子どもたちに「第３の居場所」を提供する『GRIT　LEADERS　SCHOOL』の運営を行っている。

「誰一人取り残されない」を目指して
～学校外の居場所の中での実践から～

一般社団法人かけはし　廣瀬 貴樹

生きづらさを抱えた不登校の子どもたち

公立の小学校教員として14年間、クラス担任として子どもたちと真剣に向き合ってきました。一人ひとり素晴らしい個性を持っている子どもたちでしたが、その個性を発揮できず、いろいろな場面で苦しんでいる子をたくさん見つめてきました。

学校生活では、集団の中で様々なルールがあり、一斉授業があり、決められた時間軸があります。それに合わせて、自分の個性を発揮できる子もたくさんいますが、一方でその枠やルールに苦しみ、生きづらさを感じる子もいます。教員時代には、そういった子に「自分は担任として何ができるのか」と自問自答を繰り返す毎日でした。

さらに、人間関係で悩んでいる子、家庭での事情で苦しんでいる子、学校という枠組みの中で生きづらさを抱えている子、私はクラスの中で、様々な生きづらさを抱えながら、懸命に生きている子どもたちと出会いました。その子どもたちが涙ながらに話してくれた悲痛な言葉は、今も私の心にずっと残っています。

「どうせ俺なんて……」

「自分が馬鹿だからいけないんだ」

「自分なんて死んだほうがいい」

中には、学校に行けなくなり、不登校になってしまう子もいました。一人の子は私に「学校に行くとまた誰かを傷つけてしまうかもしれない。だから自分は一人で生きていくと決めた」と話してくれました。その子は、これまでの学校生活で、何度も友達とトラブルになり、その度に心を傷めていたのです。

学校という場が、その子にとっての安心できる場にならず、結果的に自分を追い込んでいく場になってしまうことがあります。そして、人との関わりを避けるようにして、一人になり、孤独になっていく。みんなと同じように学校に行けていない、みんなと同じようにできない、自分はダメだ、自己否定感を強くしていく子どもたちがいます。

私は「その子にとことん寄り添いたい」「その子にとって安心できる居場所をつくりたい」と思い、14年間の教員生活に終止符を打ち、居場所づくりを行うことを決めました。そして、居場所を開設すると、一人の子が来てくれました。**私にできる「誰一人取り残されない」とは、目の前にいる子どもが安心できる居場所づくりのことでした。**

❶ 自己肯定感を育むための四つのこと

不登校の子どもたちの一人ひとりが不登校になった理由は様々ですが、共通しているものは、前述したように自己否定感の強さです。多くの子が、本当は学校に行きたいけれど行けないという葛藤を抱え、行けない自分を責めたり、自分がダメだからと自己嫌悪に陥ったりしています。さらに自己否定感によって、子どもたちは不安、無気力、対人恐怖などの状態になっていきます。本来、その子が持っている力を失ってしまっている状態です。

私たちは、居場所の中で、子どもたちの自己否定感を自己肯定感に変えていけるような居場所づくりを行うことを大きな目標にしました。そして、そのために大事にしたことが四つあります。

❷ 安 心

私は、その子が居場所で「安心」できることが一番だと考えました。その子がやりたいことを自由にできる場でないと「安心」ではないと考え、その子がやりたいことを何でもやっていいと伝えました。居場所の中で、強制力のあるものがあることも「安心」できなくなると考え、やらなければいけないこともありません。**その子の思いを尊重する場にすることが「安心」をつくり出すのではないかと考え、徹底的にその子の思いで居場所づくりを行っています。**

❸ 自己決定

その子に「居場所では、学校とは違って自分で時間割を決めて、やりたいことを自分で決めるよ」と伝えました。最初、その子は戸惑っていましたが、少し考えてから自分で時間割を考え、その日にやることを決めて行動していました。**自分で決めるという「自己決定」の積み重ねが、自分の生き方・人生を自分で歩んでいくことにつながると信じていたからです。**

❹ 体 験

子どもたちが安心して居場所に通えるようになると、自然とやる気が出てきて、「こんなことをしたい」「こんなことに挑戦したい」と、子どもたちの気持ちが出てきました。居場所では、子どもたちのそんな思いを叶える様々な体験ができるようにしました。

サイクリングや筋トレ講座、ダンス教室、遠足など、子どもたちがやってみたいと話すと、すぐに一緒に計画します。**体験が、その子らしさや自分づくりにつながっていきました。**

❺ コミュニケーション

居場所ではとにかく対話が重要です。その子とキャッチボールをしたり、サッカーをしたり、何かをしながらいろいろな話をしていきます。一人ひとりの悩みを受け止め、じっくりと寄り添いながら話を聞きます。さらに、居場所の中で、イベントの計画などを話し合うことを通して、相手の意見を受け止めたり、折り合いをつけたりすることを学んでいきました。それは、居場所の中で社会性を自然と学んでいる姿でもあります。

❻ 支援を充実させるためにできること

文科省の調査（令和５年度）によると、全国で34万人余りの子が不登校であると公表され、その中で、学校内外の機関で相談・指導などを受けた不登校児童生徒の割合は212,114人（61.2％）で、それ以外の13万4368人（38.8％）は支援を受けていません。

「誰一人取り残されない」という理念からはほど遠い厳しい現実が、今の教育現場には存在しています。学校が不登校の児童生徒を支援したくても、支援しきれない状況があるのならば、学校だけでこの状況を打開するという考え方ではなく、子どもたちが学校外で学べる居場所を増やしていくなど、学べる選択肢を広げることが重要であると、私は考えています。

しかしながら、学校外の居場所は、まだまだ数が少なく、持続可能な運営もままならないのが現状です。**それが今まで以上の支援をするためには、行政や学校、民間、地域が手を取り合い、パートナーシップを確立させていくことしかないのではないか、と考えています。**学校・フリースクール・居場所が、信頼関係を構築しながら一人の子どもの支援を考えていけるように、それぞれが情報共有し合える連携の在り方が重要です。

「かけはし」の居場所は、不登校の児童生徒が在籍する42校（令和６年１月時点）と連携しており、年間のべ120回ほど訪問しています。子ども一人ひとりが居場所でどのように成長しているかについて、学校の先生方に伝えることで、児童生徒理解を双方が深めることを目的としています。また、学校の先生方に、学校以外の学びの場・成長の場としての居場所の存在を伝えることにもつながります。

そういった地道な連携によって、居場所に来ていた子が再び学校に登校するチャレンジをしたり、学校と居場所を行き来したりして、子ども自身が学びの場を選べるようになっています。まさに子どもの学びの選択肢が広がっている姿であると感じます。

さらに、行政との連携、地域との連携も不可欠です。私たちが、行政や地域に、不登校児童生徒の現状を伝えることで、不登校の支援の存り方をともに考えたり、地域全体でその子たちを見つめたりして、**子どもたちを「誰一人取り残されない」まちづくりにつなげていけると考えています。**

私たちにできることは、パートナーシップを確立する“かけはし”になることです。これからも、「誰一人取り残されない」（子どもが自分の力を信じて人生を切り拓いていく力を育むこと）を本気で目指し、実現させるために、居場所づくりを通して自分たちにできることを全力で取り組んでいく決意です。

【廣瀬 貴樹：プロフィール】
一般社団法人　かけはし　代表。横浜市で14年間小学校教員として勤務。子どもたちと日々向き合う中で、「生きづらさを抱えている子どもにとことん寄り添いたい」と考えるようになり、退職。その後『まなべる居場所「かけはし」』を設立。現在、「かけはし」の代表として活動を推進している。

「学校連絡・情報共有サービス COCOO(コクー)」のサービスを提供する
株式会社137の代表取締役社長・黒田千佳氏に話を聞きました。

学校連絡・情報共有サービス
COCOO(コクー)とは

- 24時間欠席連絡受付 ／ 電話またはWEBから欠席理由も自動集計
- 双方向可能な学校連絡 ／ アンケート機能つき
- 先生から学校予定を共有 ／ご 家庭での予定登録OK!

などのサービスを提供する校務支援ツールです。

「誰一人取り残されない」に向けて

話：株式会社 137　代表取締役社長　黒田 千佳

要約：横浜市立綱島東小学校　副校長　杉本 敬之

Q 会社を立ち上げるきっかけについて

2008(平成20)年に進学塾で働いていた時に、その系列法人を立ち上げる機会がありました。そこで私は、子どもたちの学びの安全・安心を保つための法人を構想しました。そのような経験をする中で、3.11(東日本大震災)があったのです。

3.11を「きっかけにして、社会とどのようにして向き合うのかを深く考えるようになりました。社会課題を解決するために自分ができることを考えようと思い、大学院に入学することを決意したのです。そして、株式会社137を2014年に立ち上げました。

豊かな学び、そして学びは武器になる。安全・安心とともに、そこにいていいんだよという会社をつくりたいという思いを持っています。現在のCOCOO(コクー)の由来は、大学院の指導教官から「社会課題を解決するためにテクノロジーを活用する」ことを学んだことから着想を得ています。

Q 学校連絡・情報共有サービス「COCOO(コクー)」について

先生方の長時間労働は解決したい喫緊の社会課題になっています。情報共有の非効率・不確実性が起因していると考えています。これが改善されることで、学校に行きにくくなっている子どもによい影響が与えられると思います。「誰一人取り残されない」という視点から、電話での欠席連絡の機能を取り入れています。教育DXも推進していて、全校で導入している自治体では、欠席状況などを全自動で集計することができています。

「COCOO(コクー)」によって、学校管理職や先生たちが自由になっていきます。そして、保護者にも余裕が生まれてきます。忙しい人たち(教育関係者)の社会課題を解決するために、これからも未来に向けて進化を続けていきたいと思います。

Q 教育について考えていること

北欧のある国では、日本でいう高学年まで通知表がありません。人と比べる必要がない状況からです。あなたはあなたの存在でよいとなるので、自分の好きなところが見えてきます。また、教員と子どもの信頼関係があることで、子どもの安全・安心がつくられています。

今の日本社会を見ると、「本当にあなたが好きなことは何？」と聞いても、忖度して言っているように感じます。「あなたはあなたらしくてよい」と思います。違うことを心配しなくていいのです。

子どもは幸せになるために学校に行きます。学校という空間が一緒にいる家族のようになるのがよいと思います。例えば、特別支援を必要とする子どもです。様々な子どもたちが一緒にいてよいです。みんなにとって居心地のよい場所になってほしいです。誰もが受け入れられる風土が大切です。それが人と人との信頼関係を育むことにつながります。

Q 「誰一人取り残されない」の実現に向けて必要だと感じること

みんな誰もが特別な存在です。誰かに合わせる必要もありません。あなたはあなたで、人生の主人公は自分だ、という意識が大切です。

これは、「子どもは子どもの人生、親は親の人生を過ごす」ことにつながります。私自身も、子どもの通知表は必要ないと思っていました。あくまでも担任の先生が見た評価だからです。

親は、親自身の人生を大切にしてほしいです。時として、親自身の理想を子どもに投影してしまうことがあります。子どもには子ども自身の人生があります。親は、子どもの応援者として、距離を保つことが大切です。

その時には、親と子どもの「対話」の時間をとってほしいです。「人生を送ること」は、自分の人生を見つめながらどのように生きていくのかを対話をしながら過ごしていくことです。そのために「対話」が重要になります。もちろん、成長していくのは大人も同じです。できない自分も受け入れながら過ごしてもらいたいです。

最後に

新しい価値を生み出すために、ブレインストーミングをし続けることが大切です。無駄なことは一つもありません。これは、教科書づくりの際も同じです。思考を重ねていくことで、新しい価値が生まれてきます。

感性を磨く学びは大切です。体験したことをもとにして感性が磨かれていきます。体験した時の感情を分析します。どのような時にワクワクしたのか。これは忖度する必要はありません。安全・安心の環境があることで力が伸びていきます。正解はありません。自分と向き合うことが豊かな学びにつながります。

企業には、会社にいる人を育てるミッションがあります。私は、働いている人たちが幸せになるためにはどうしたらよいのかを考えるのが好きです。先生方には、様々な学びを子どもたちに循環させながら未来を一緒に創る人を育ててもらいたいです。

【黒田　千佳：プロフィール】
株式会社137(イチ サン ナナ)　代表取締役社長。「誰一人取り残されない」をテーマに社会課題解決型の事業構想から、新たな価値の創出をしている。「学校連絡・情報共有サービス COCOO(コクー)」は、2019年横浜市と協定書締結にて実装検証を経て、翌年4月サービスリリース。現在、株式会社137の代表取締役社長のほか、事業構想大学院大学の特任教授を務めている。

「誰一人取り残されない」の実現を目指して まとめ

「誰一人取り残されない」の実現のためには、様々な立場からの多面的なアプローチができます。この冊子の執筆者に共通しているのは、「子どもたち一人ひとりに寄り添い、個々のニーズに応じた支援を実践し続けること」だと考えます。

亀田さんは、不登校の生徒との信頼関係を築き、「誰一人取り残されない」学びの保障を実現しようと取り組んだ事例を紹介しています。

私は、学校管理職(副校長)として教職員が働きやすい環境を整え、地域や大学生との協働を通じて、子どもたちに寄り添った教育を実現しようと取り組んでいます。

宗像さんは、「安心感のある教室づくり」を通して、子どもたち一人ひとりが、自分らしさを表現できる環境を整えることの重要性について触れています

岩羽さんは、子どもたちの「学びの楽しさとは何か？」を追究する中で、子どもたちそれぞれが持つ、個性を伸ばす「第３の居場所」を作ることを実践しています。

廣瀬さんは、自己否定感を抱える子どもたちに、安心できる居場所「かけはし」を提供し、一人ひとりの自己肯定感を育むことを目指した取り組みを進めています。

黒田さんは、ICTを活用した学校連絡・情報共有サービスを提供し、教員の長時間労働の解決や情報共有の効率化を図っています。

これらは、教育現場で直面する課題に対して、多角的なアプローチを提供し、子どもたちが安心して学び、自分らしさを発揮できる環境を整えるための重要な取り組みであるといえます。そして、読者のみなさんが日々取り組んでいらっしゃることも、「誰一人取り残されない」の実現のためのアプローチです。大切なことは、それぞれの取り組みの内容を知るに留まらず、その意義を考えることです。ぜひ、これからも取り組みを継続していただき、ともに「誰一人取り残されない」の実現を目指していけたら幸いです。

横浜市立綱島東小学校　副校長　杉本 敬之

※表紙の似顔絵イラスト作成：松田　汐那

※本冊子に掲載しているイラストはすべてイメージです。

「誰一人取り残されない」の実現を目指して

日文教授用資料
令和７年（2025年）3月21日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33769

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大 阪 本 社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東 京 本 社　〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九 州 支 社　〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3

東 海 支 社　〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690